

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：10101

研究種目：挑戦的研究(開拓)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K20499

研究課題名(和文) 諸宗教における正典化をテーマとする、比較宗教教典研究の立ち上げのための総合的研究

研究課題名(英文) Collective studies for establishing a field of comparative studies of sacred texts, setting as its theme the canonization of sacred texts in various religions

研究代表者

戸田 聡 (TODA, Satoshi)

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：20575906

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,600,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトが目ざした比較宗教教典研究なるものは、未だ存在したことのない学問分野であり、果たしてそういう研究分野の立ち上げが可能かどうかはわからない、そういう状況でのプロジェクト実施となった。そもそも挑戦的研究という科研費の種目自体がこういう試み・企てを受け止めるための種目であることに、本プロジェクトはまさに合致していたと言ってよい。したがって、研究成果(より具体的に言えば、比較宗教教典研究という研究分野の立ち上げということ)が果たして明快に得られるかどうか、不透明な中でプロジェクト開始となった、ということをおまじ記しておくたい。(以下、本プロジェクトの報告を参照)

研究成果の学術的意義や社会的意義

人文学において通例であるように、本プロジェクト実施の結果得られる「成果」それ自体、またその「成果」の学術的意義やさらに社会的意義といったことは、実施直後から直ちに可視化されうるようなものでは必ずしもない。その上で述べるなら、本プロジェクトは、各参加者にとって知的刺激に富む内容を有していたと断言してよい。この点は、本プロジェクトの各研究会合や、最後に実施した「まとめの研究会」への各参加者の反応から明らかであり、この点が、本プロジェクトを他の数多くのいわゆる「共同研究」と区別している、とあえて言うておきたい。

研究成果の概要(英文)：Comparative studies of sacred texts is a field of study which has never been heard of, and it started from the point where one is not certain whether such a field of study can exist or not. Thus the kind of the grant-in-aid given to this project, which is called "Grant-in-Aid for Challenging Research (Exploratory)", suits this project perfectly. And this means that at the outset it was far from evident whether a clear-cut result, such as the establishment of the field of study, could be obtained by this project or not. This needs to be stressed. (For the rest, see the report of this project written in Japanese.)

研究分野：古代キリスト教史

キーワード：聖典 教典 正典 仏教 キリスト教 ユダヤ教

1. 研究開始当初の背景

(以下敬称略)本プロジェクト「諸宗教における正典化をテーマとする、比較宗教教典研究の立ち上げのための総合的研究」の応募のそもそものきっかけとなったのは、北海道大学に所属する研究者3名(林寺、宮嶋、戸田)が、何か共同研究めいたことを実施できないものかという相談を行なったことである。この相談の中では、本プロジェクトとやや観点の異なる研究プロジェクトの構想も持ち上がり、実際にその別構想をもとに民間助成金への応募を行なったこともあるが(結果は不採択)、そのような営みをする中で「比較宗教教典研究」というアイデアが浮かんだ。すなわち、林寺は仏教(特に漢訳仏教)の教典研究者であり、戸田もまた、教典研究それ自体を自らの研究の中心的なテーマとしてきているわけではないとはいえ、留学から帰国した2006年以降今日に至るまでの間に様々な形で教典をめぐる問題を研究しており、見方を変えれば、教典研究を執拗に進めてきたと言えなくもない状況にあった。また、宗教学を専門とする宮嶋は、自ら特定の宗教の教典研究に従事してはいないものの、東京大学の宗教学研究室出身者として様々な宗教の研究者へのコネクションを有し、本プロジェクトがいわゆる世界宗教に限らない様々な宗教への関心を広げるためには大いに貢献する可能性を有する人士であると理解された。

そこで、このメンバーにユダヤ教研究の専門家として同志社大学の勝又を加えて、それぞれが日ごろ行なっている個別宗教の教典研究を持ち寄って、互いに比較しかつ相互学習(本プロジェクトの申請書で使った表現を用いるなら、「相互浸透」)をしたなら、どういう横串が貫通可能か、などといった関心が湧いてきた。そして、これをテーマにして科研費への応募を行なおうということになった次第である。その際、キリスト教、ユダヤ教、仏教の研究者はいるものの、他の有力な世界宗教であるイスラム教の研究者はメンバーの中にいない、ということが問題となったが、これについては、仄聞する限り、例えばキリスト教におけるような意味での教典研究(ここではいわゆる聖書学をも含めて教典研究ということを考えている)がイスラム教に存在しないことはほぼ明白だったので、この点は、極めて率直に記すなら、イスラム教においては例えばクルアーンの中のムハンマドの言葉の一部がムハンマドに由来しない可能性を論じることが宗教的・学問的・社会的に全く不可能である(これに対してキリスト教の聖書学においては、イエスに帰せられる言葉の一部がイエスに由来しない可能性を論じることが、宗教的には困難だとしても、学問的・社会的には全く可能である)、ということから明白だと言える、むしろ本プロジェクトが、イスラム教の教典研究の礎石を置くことにつながるなら、などという、無論傲岸不遜ではあるが、とはいえ全く見当はずれとまでは言えないよう

な趣旨の内容をも、本プロジェクトの申請書の中には書き加えた。そして実際、イスラム教の教典研究の現状と成立可能性とを探ることも、本プロジェクト（少なくとも研究代表者）の中心的な関心事の1つであり続けた。

2. 研究の目的

1. に記したように「相互浸透」を旨とするという本プロジェクトの方針から明らかなように、本プロジェクトの実際の運営は、基本的にオンライン会合で代表者・分担者が集まって（及び、第2年度からはゲストをも交えて）、そのつど設定したテーマについて、各自の宗教教典研究の立場から発題・議論を行ない、かつゲスト参加の場合には、ゲストが自らの専門の立場からまず発題し、その上で議論を行なう、という形をとった。

ここで特筆すべきは、この毎回の会合では非常に活発な議論が行なわれ、会合に対する参加者の満足度は概して非常に高かった、という点である。あえて言えば、このことこそが本プロジェクトの意義を証している、と代表者としては言いたい。すなわち、科研費プロジェクトでは往々、実施期間の最終年度に当該プロジェクトのテーマに関する論文集をまとめるという形で「成果」が示されることが多いが、私見によれば、そのような論文集作成、及びそれに至るまでの共同研究が、参加者たちの研究関心を十分にすり合わせた上で行なわれることは稀であり、むしろ、まとまった「成果物」からその背景に窺い知ることができるのは、あくまで形式的・表面的な意味での「共同」研究である、ということが少なくない。これに対して、本プロジェクトの少なくとも代表者と分担者は、オンライン研究会合を繰り返すことを通じて、相当程度研究関心をすり合わせることができたと言ってよいのではないかと。また、個々の参加者の高い満足度は、当然ながらそれら各人の研究に大なり小なり何らかの刺激・好影響をもたらすであろうことが期待できるのであり、つまり言い換えれば、本プロジェクトのような実施形態は、参加した研究者のエンパワーメントを大いに促進したと言ってよいのではないかと。この点は、具体的な成果物という形で表現できていないとしても、形式的・表面的な「共同」研究の場合とは大いに異なる実質的な成果だと言ってよいと思料する。

3. 研究の方法

但し、反省すべき点もないわけではない。特にそれは、研究の方法にかかわる問題である。既述のように、本プロジェクトが立ち上げを目ざした「比較宗教教典研究」において、具体的に何を獲得すべきか、或いは何が獲得可能かということは、開始当初から明確だったわけでは必ずしもなく、そして代表者自身の中では、会合を重ねる中で例えば、異なる宗教の教典研究で共通に使用することができる概念或いは用語の獲得が重要なのではないかと、という考えが

次第に強まってきた。その結果例えば、「成立時共同体」や「教祖言語」「教典言語」といった概念・用語に想到することとなったが、このあたり、つまり研究方法にかかわる共通理解が、プロジェクト参加者の間（特に代表者と分担者の間）で形成されていたかと言えば、プロジェクト実施期間全体を通して、そこまでには至っていなかったというのが率直なところである。つまり、より正確に記述するなら、上で述べたような概念・用語を個々の参加者（特に代表者及び分担者）が自らの概念・用語として（あえて言えば、自家薬籠中のものとして）各々自らの専門分野に適用し、その概念・用語の有効性・限界を見定めて、その認識を他のプロジェクト参加者たちと共有する、といったところには、残念ながら至っていなかった。この最後の「共有」というところが、比較宗教教典研究という新たな分野の真の意味での立ち上げのためには決定的に重要だったと代表者自身は理解しており、これができなかったのは、そもそも代表者自身が当の概念・用語を思いつくに至ったのがプロジェクトの最終年度（第3年度）になってからだったという事情が関係しており、つまり、（上述したような適用・共有に至るまでの）時間が足りなかったことが主因だと代表者自身は考えている。やはり、本プロジェクトが目ざしたような、認識・方法の高いレベルでの共有のためには、それなりの時間が必要だった、ということなのだろう。そのような共有を経て鍛え抜かれた概念・用語のみが比較宗教教典研究のための使用に堪えるのであり、外国の学術用語の翻訳でなく自前の学術用語を持つこととは、このような過程を経て初めて可能なだろうと改めて思い知った次第である。

4. 研究成果

かくて、本プロジェクトに直接にかかわる研究成果として挙げられるのは、『北海道大学大学院文学研究院紀要』所収の代表者自身による論考（2つあり、うち1つは印刷中）のみであり、成果物としては決して多くないと言わねばならない。しかし、既に記したように、本プロジェクトが各参加者にもたらした刺激は決して少なくなかったと言ってよく、今後それら刺激がもととなって、各参加者が各自の分野で研究を発表する際に、それら刺激が何らか活かされる場合は大いにありえよう。

そしてそもそも、本プロジェクトが志した「比較宗教教典研究」に関しては、事態は今後も同様であるほかないと思料される。というのは、そもそも個別宗教の教典研究（これはそれぞれの宗教について数十年～数百年の歴史を有すると思われる）は、その奥行き^たの深さゆえに、それに専心する専門研究者個々人によってのみ遂行可能であり、他方、それら個別研究に横串を刺すべき営みである「比較宗教教典研究」は、それぞれの個別研究が「教典」研究という意味で互いに共通性を有する以上、必ずや個別教典の研究者の研究関心を刺

激せずにはいないからである。本プロジェクトの代表者自身が再びこれを手がけるか否かにかかわりなく、「比較宗教教典研究」の試み・企てはつねに刺激誘発的・触発的であり続けるだろうと、ここではあえて断言しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 戸田 聡	4. 巻 165
2. 論文標題 比較宗教教典研究をどう立ち上げるかに関する覚書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道大学文学研究院紀要	6. 最初と最後の頁 61-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/bfhhs.165.161	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	勝又 悦子 (Katsumata Etsuko) (60399045)	同志社大学・神学部・教授 (34310)	
研究分担者	林寺 正俊 (Hayashidera Shoshun) (60449361)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	宮嶋 俊一 (Miyajima shunichi) (80645896)	北海道大学・文学研究院・教授 (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------